様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５８６２１１８

研究課題名（和文）看護学生‐患者間における心理的距離尺度の開発と臨地実習指導体制の構築への実用化

研究課題名（英文）Practical application for development of scale psychological distance between nursing students and their patients during and construction of clinical practical teaching system

研究代表者
臼井　麻里子（USUI, MARIKO）

島根大学・医学部・助教

研究者番号：７０６３６６３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、臨地実習における看護学生と患者との間にある心理的距離に影響を及ぼす要因を明らかにし、看護学生が患者と看護援助関係をよりよく築くことができる臨地実習の指導体制を構築することを目的とする。結果、【看護学生としてのステレオタイプ的認知】【自己と患者の同一化】【臨地実習という未知の体験に対する関心】【能動的解釈からくる回避的思考】【能動表出による歪み】【患者の本音と向き合うことへの躊躇】【患者の病気に対する躊躇】【自己の未熟なコミュニケーション能力】【患者から拒絶されることへの恐怖】の9つのカテゴリーが生成された。

研究成果の概要（英文）：This study will clarify psychological distance for the purpose of creating a relationship between the nursing student and the patient.As a result, nine categories [the fixed idea of oneself as a student] ,[identification of the self with the patient], [the interest in the unknown experience of clinical practicum], [avoidance that came from a self-centered interpretation],[Distortion from self-centered interpretation], [the hesitation facing the patient's real feelings], [the hesitation concerning the patient's illness], [their own inexperienced communication skills], and [the fear of being rejected by the patient] were generated.

研究分野：看護教育

キーワード：臨地実習　看護学生　心理的距離

１．研究開始当初の背景

看護実践能力を向上させる有効な手段として臨地実習はきわめて重要であり、大学 1 年次、2 年次の早期から臨地実習は開始されている。しかし、看護学生は患者と接する機会や経験が少ない中で臨地実習を行っており、1 年次および 2 年次の看護学生が臨地実習において、患者とどのように接していいのか分からない、担当する患者に対する思い入れが強すぎて患者に巻き込まれるなどといった対人関係に関連した問題が生じている。対人関係を表す視点として「心理的距離」という関係的視点があり、看護教育においては看護学生の不安に関して報告されてきた。しかし、1 年次および 2 年次の看護学生の臨地実習における心理的距離には学生自身が構築してきた対人スキルやストレス対処方法が関与していると考えられ、これらを含めた心理的距離の構成要素の検討は急務となっている。

２．研究の目的

本研究は、看護系大学の 1 年次および 2 年次の看護学生が行う臨地実習において、看護学生と患者との間にある心理的距離に影響を及ぼす要因を明らかにし、看護学生が患者との看護援助関係をよりよく築くことができる臨地実習の指導体制を構築することを目的とする。

具体的には、先行研究によって明らかにされている心理的距離の「能動表出距離（自己側の行動によって示される表出的距離）」「能動表象距離（本心としての表象的距離）」「受動表出距離（認知された相手側の表出的距離）」「受動表象距離（推測された相手側の表象的距離）」の 4 つの側面が、看護学生と患者間においても適応できるのか、新たな側面の有無について明らかにする。

さらに、看護学生の対人スキルやストレス対処方法をふまえた心理的距離に影響する要素について検討を行う。

３．研究の方法

（1）看護学生における心理的距離の 4 つの側面ついて

看護系大学において 1 年次および 2 年次の臨地実習を終了した看護系大学 2 年生の学生 12 名に対し、半構造化インタビュー調査を行った。調査期間は 2013 年 10～11 月、看護系大学の 2 年次に行われる臨地実習を終えた 2～3 か月後に行った。

調査内容は、看護学生が患者とのコミュニケーションを行った場面で感じたことや考えていたことおよび実際に行動として表出した行為、臨地実習期間中および臨地実習を終えての自己と患者の心理的距離の変化、看護学生と患者間の関係に関する考え方、臨地実習に関連した出来事、患者の疾病に対する理解や学習に関する困難などである。

分析方法は、インタビュー調査の内容をもとにコーディングを行い、看護学生と患者間における心理的距離の 4 つの側面と新たな側面の有無について焦点を当てたコードの体系化と階層化を行った。

（2）看護学生の心理的距離に影響を及ぼす要因について

看護系大学において 1 年次および 2 年次の臨地実習を終了した看護系大学 2 年生の学生 12 名に対し、半構造化インタビュー調査を行った。調査期間は 2013 年 10～11 月、看護系大学の 2 年次に行われる臨地実習を終えた 2～3 か月後に行った。

調査内容は、1 年次および 2 年次の臨地実習期間においてストレスであった事象とその時に看護学生が行ったストレス対処方法、臨地実習を行う以前の看護学生のストレス対処方法、今までに患者や健康障害を有する人との関わる機会の有無や経験内容、患者とのコミュニケーションにおいてストレスとして感じたこと、患者とのコミュニケーションをとることへの積極性などである。

分析方法は、インタビュー調査の内容をもとに看護系大学において 1 年次および 2 年次の臨地実習を指導した経験をもつ看護教員 5 名で M-GTA を用いて分析した。

４．研究成果

（1）看護学生における心理的距離の 4 つの側面について

看護学生は臨地実習において、患者から疾病や死に対する思いを表出されたときに適切に対処ができるか不安や恐れを抱いていた。看護系大学の 1 年次および 2 年次の看護学生は疾病や病態生理、検査、治療に対する講義が未履修であったり、履修途中であったりする。そのため、特に臨地実習で担当した患者の健康障害に対する理解が不十分となることも含め、看護学生と患者間に「能動表出距離」があることを示していた。このことは看護学生が患者とのコミュニケーションを行うことの積極性や話への集中に影響していることが示唆された。

また、健康障害を有する人と接した経験や自己体験が少ないことから、患者の病気や予後に対するジレンマを看護学生は生じていた。さらに、臨地実習を通して医療者になるという責任感の重さを感じてたり、自分自身が今まで抱いてきたもしくは潜在する患者という健康障害を有する人への思いに表象させており、看護学生と患者間において「能動表象距離」があることを示していた。

さらに、看護学生は臨地実習における患者の協力に感謝するとともに、なにもできない自分という申し訳なさや、患者の体調が悪そうだから話すことができないという思い込み、健康障害を有した自己の経験の少なさにより、推定には様々なバイアスが作用されていることが示唆された。このことは、看護学生と患者間に「受動表出距離」があることを

示していた。また、心理的巻き込まれを経験した学生からは患者を祖母などの親近者に投影して考えたり、患者に対して距離を感じる学生は患者が看護学生のことを迷惑と思っているなどと悲観的に感じる傾向が示唆された。

また、看護学生は患者からの言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションも含めた患者の応対に対して、患者の発した言葉の真意や話の行間が分からないといった経験をしていた。このことは看護学生と患者間に「受動表象距離」があることを示していた。

以上のことより、看護学生と患者間においても心理的距離の「能動表出距離」「能動表象距離」「受動表出距離」「受動表象距離」の 4 つの側面は見出されており、新たな側面は見出せなかった。

また、対人関係における心理的距離は「自己から相手への距離感」と「相手から自己に向けてきた距離感」の 2 つが原理的に並行されていると先行研究にて述べられている。看護学生と患者の間にある心理的距離においても、看護学生はこの 2 つの距離感を感じており、自己の認識と行動が結びつかないことや患者から看護学生へ表出された行動によって自己の行動とのズレや違和感を生じていることが分かった。このように看護学生の能動表出は受動表出と一致していないこと、ズレが生じていることがあり、そのことが看護学生の戸惑いや不安感、思考の停滞へとつながっていることが示唆された。

（2）看護学生の心理的距離に影響を及ぼす要因について

分析の結果、21 概念、11 カテゴリー、9 カテゴリーとして【看護学生としてのステレオタイプ的認知】、【自己と患者の同一化】、【臨地実習という未知の体験に対する関心】、【能動的解釈からくる回避的思考】、【患者の本音と向き合うことへの躊躇】、【患者の病気に対する躊躇】、【自己の未熟なコミュニケーション能力】、【患者から拒絶されることへの恐怖】、【能動表出による歪み】が生成された。

【看護学生としてのステレオタイプ的認知】は臨地実習の初期段階において看護学生は、臨地実習の経験の少なさや医療者としての経験がないことにより思考の幅が狭く、複数の手段を考えられないこと、自己認識の不十分さからくる自己自身の学生像への固執と定義した。

【自己と患者の同一化】は、患者の雰囲気や性格、表情などを自己に関係あるものとして認識し、行動することと定義した。また、学生が患者の雰囲気や会話の内容に対し先入観や思い込みを抱き、関係を構築していくといった自己の経験に基づいた意味付けとして逆転移が生じていることもあった。

【臨地実習という未知の体験に対する関心】医療現場で学ぶという期待や患者のために自分が何かしたいという思い、看護学生としての初めての臨地実習や担当患者との出会いに対する期待、机上学習である講義と実践の結び付けに対する期待と定義した。

【能動的解釈からくる回避的思考】は、学生が患者に対して話しやすさや受容的態度を求め、対処できないことやできそうにないことに対して回避的行動をとること、踏み込むことができないことと定義した。

【患者の本音と向き合うことへの躊躇】は表面的な会話による落ち込みや本音への対応ができないことや自信がないこと、自身の言動に対する責任の重さを感じていると定義した。

【患者の病気に対する躊躇】は、疾患や身体状態、状況に対する学生の過剰反応、思考停止、学生自身により歩みを止めることや積極的に行動に移すことができないことと定義した。

【自己の未熟なコミュニケーション能力】は、適切な話題や返答に不安を感じたり、自信を持って行動できないことと定義した。

【患者から拒絶されることへの恐怖】先輩からの情報により臨地実習に対し不安な思いや恐怖を抱いて患者と率直に関わることへの戸惑い、臨地実習の単位習得に対する不安と定義した。

【能動表出による歪み】は患者という健康障害を有する人への固執や会話中の間の長さや無言に対する否定的感情と定義した。

また、カテゴリーの影響関係や変化は、【看護学生としてのステレオタイプ的認知】や【自己と患者の同一化】や【臨地実習という未知の体験に対する関心】や【能動的解釈からくる回避的思考】【能動表出による歪み】によって患者に対する親しみや隔たりを感じ、人間関係における心理的距離に影響を及ぼしていた。また、看護学生は患者と接する中で【患者の本音と向き合うことへの躊躇】や【患者の病気に対する躊躇】や【自己の未熟なコミュニケーション能力】や【患者から拒絶されることへの恐怖】を抱きながら臨地実習を行っており、これらのことが患者との関係構築における接近や回避の思考や行動に反映されていた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

①Mariko Usui, Miki Fukuma : Factors that Influence Psychological Distance between Nursing Students and Their Patients during Clinical Practicum. 19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (Chiba) 2016.3.15

６．研究組織

(1)研究代表者

臼井　麻里子（USUI MARIKO）
島根大学・医学部・助教
研究者番号：70636638